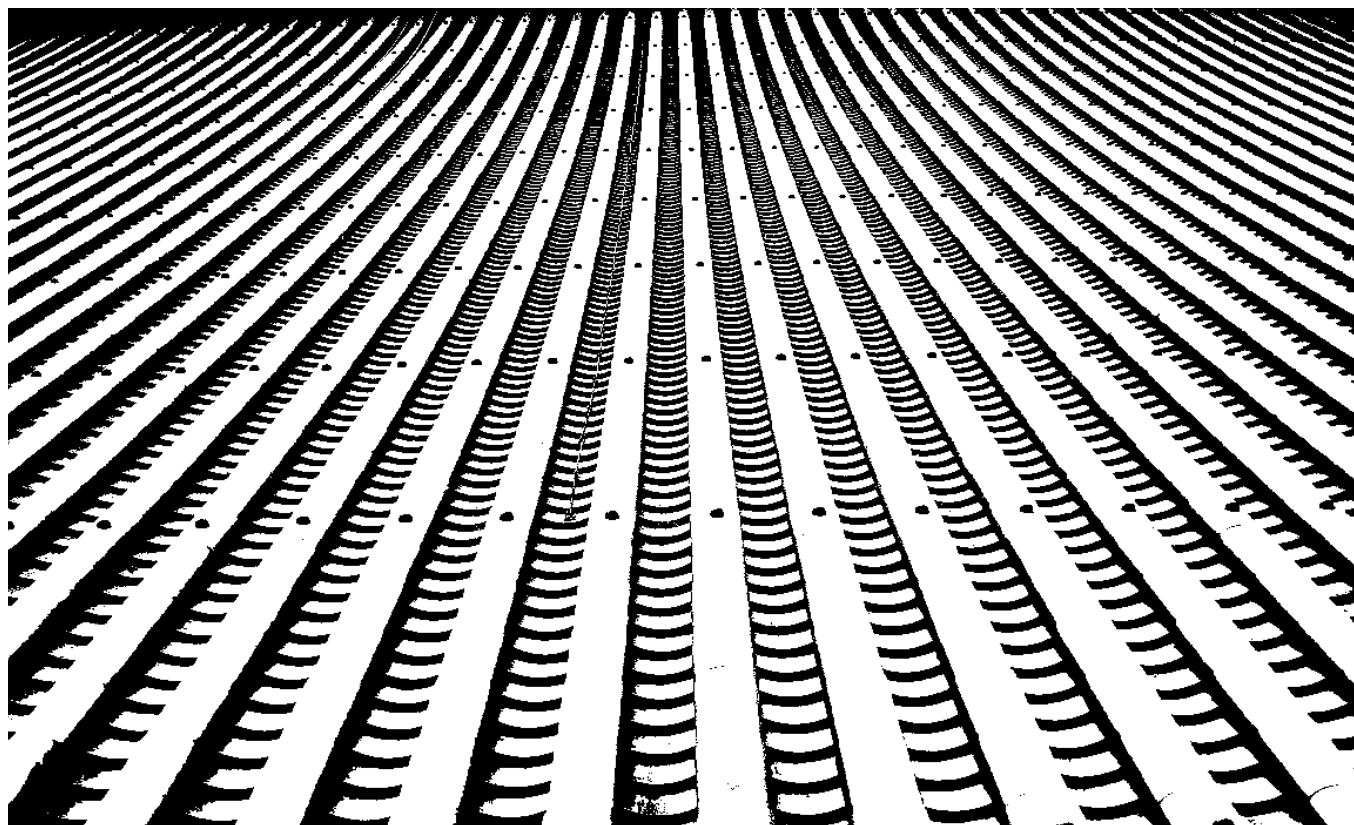


同関協だより

第45号



＊ 第45号 主な内容 ＊

- ☐ 「同関協道」・・・ 2～3
- ☐ ごあいさつ・・・ 4～5
- ☐ 御遠忌特集・・・ 6～9
 - 「被差別の食卓」
 - 「竹田の子守唄」
 - 「同関協の御遠忌」
- ☐ 現地研修報告・・・ 10～15
 - 「大谷派糾弾会とは？」
 - 「真宗教学と部落問題」
- ☐ 新編集委員挨拶・・・ 16

私たちは、

教団内外における部落差別の克服を願いとし

差別に苦しむものが一人でもいる限り

その差別からの解放を自らの課題とする

「同関協」規程前文

同関協道

同朋会運動という名の信仰運動が始発して間近に五十年という節目を迎える。

今、宗祖親鸞聖人の七百五十回御遠忌が厳修されますことは、感慨深いものがございます。当時の宗務総長演説の中に、この同朋会運動発足について、「これは宗門内外の歴史的な必然性並びに思想的な根拠、及び宗門内における具体的な要求等により」とあり、「真の人間の自覚を明らかにし、現代の人類の課題にこたえるべき使命を荷っている仏教の、その使命を果たすべき『場』が仏教の教団であります。然るに仏教教団の現状はどうであるかと申しますと、ご承知のように、遺憾ながら未だ前近代の様相を脱することが出来ない実情でありまして、急ぎ近代化への脱皮が要請される所以であります。（中略）同朋教団が否でも応でも宗門近代化の使命を荷って発足せざるを得ない」と述べられています。

そして七百回御遠忌後の御教書に「人類の願いに応え、自らを失いつつある人間に、自覚の道を示す」とあり、現実の社会に、原理と方向とを与えることを教団の歩みとすることをもって今日に至りました。その歩みの中で難波別院輪番差別事件が起こり、一九六九年より八回におよび部落解放同盟による糾弾を受け、宗祖の御教えに反して、同朋教団にあるまじき差別教団であったことを、我々が問い返す契機になりました。

しかし、その後も教団内において差別事象はあとを絶たず、一九七八年に、宗門の同和運動推進の母体となり、同和運動の推進がまた同時に、同朋会運動の正しさの証となるものであると、同朋の会テキストに『仏の名のもとに』が発刊されました。それから三十数年経ち、内局が代わる度、一九七七年同朋会運動一五周年全国大会で確認された

一、古い宗門体質の克服

一、現代社会との接点をもつ

一、真宗門徒としての自覚と実践

が宗門の課題であると申されてきました。しかし、その課題を課題としなければならない現状の宗門、五十年前に必然的に始発した同朋会運動には宗門内に、我々一人ひとりに具体的な要求があった、願いがあったことでもあります。その願いと要求とは、「親鸞を返せ」という内発的自覚からのものでありました。

しかしその願いが失せてしまっていること自体の自覚なくして同朋会運動はありえません。そしてその自らの内に発せしむるはたらきが糾弾にあうというご縁であったことも間違いのない歴史的事実でありました。しかし、その糾弾により促され、差別教団であったと懺悔し、教団自体の近代化へと脱皮する機会を頂いたにも関わらず、旧態然としたまま今日に至っていることも事実であります。それは一朝一夕に教団の改革は難しいと言うだけに留り、差別教団であったと教団自らの名告りであるということが一人ひとりの上で確認されないままであったこととであります。

糾弾を受け差別教団であったことの中味が倫理的道德の範疇の反省であったことを暴露してしまったのが今日に至る教団であったことを物語ると同時に、それは「機の深信」の不徹底こそが課題であるということでもあります。

今般の七百五十回御遠忌を機縁として、机上の教学から、「機の深信」の徹底した人間の教学に転換することを、人間を見つめてきた「同関協」から発信していきたいと思っております。

真宗大谷派同和関係寺院協議会 会長 片山寛隆

重責

真宗大谷派同和関係寺院協議会 副会長 松尾英城

二〇一〇年度真宗大谷派同和関係寺院協議会（以下「同関協」）総会において、副会長という重責を任じられました。もとより、力量不足は承知いたしております。会員の皆様のご指導ご協力を頂かなければ任を全うすることは出来ません。何卒宜しく願います。

私自身が日頃大切にさせて頂いている先師の言葉の一つに「これからがこれまでを決める」という言葉があります。これまでという過去は固定したのではなく、これから自らがどのような歩みをするかによって、決まってくるということです。

「同関協」は一九七四年に発会をいたしました。その発会についての趣意書には、「然もこの被差別の未開放部落は、大部分宗祖聖人の御教を信ずる門徒であり、その苦渋と血のにじみ出る解放への叫びは同和関係寺院の共感する声であり、責務でありますと共に、その願いに挺身せねばならない事は言を俟たない事実であります。（略）吾宗門内にありましても、とくに同和関係寺院が、今こそ相提携して、この完全解放が達せられますよう、真剣に結集し、その運動の展開に邁進しなければ、宗門人としては勿論、宗祖聖人の念仏の教えすら失われる結果となりましょう。一日も早く完全に解放できる社会を念じここに協議会を新たに発足させて参りたい所以でもあります。」とあります。

また、朝野温知師は『宗教に差別のない世界を求めて』のなかに「同関協」の「主体的目的は、我々に親鸞をかえせというに尽きる」と記しておられます。これこそ「同関協」会員一人ひとりに通底すべき願いでありましょう。その発足時の願いが願われ続けられてゆくか否かは、私達がこれからどのような歩みをするかによって思われます。

そう考えます時に、目睫に迫った「宗祖としての親鸞聖人に遇う」という理念による宗祖の七百五十回御遠忌を、私達は如何にお迎えしお勤めすべきなのでしょう。宗祖に遇うとは、いうまでもなく宗祖の「御同朋・御同行」という精神に遇うということでもあります。そして、その精神とは、私の理知によるところの我と我が身の事実とのあい・領きではなく、広島における現地研修での小森龍邦氏の言葉を借りれば「大慈大悲心にかなう我と我が身の事実」とのであい、領き、すなわち本願念仏のはたらきにより悲しまれつづけている自己とのであいを迫るものでありましょう。その「同朋精神」を、部落差別という具体的な問題のところでは確かめつづけ・学びつづけ、部落差別が成り立たない社会の顕現を目指すところに「同関協」が御遠忌を勤めるスタンスがあると思います。そのことが、発会時の願いを願いとしつづける私達のこれからの歩みになってゆくのではないのでしょうか。

最後に、今後三年間の副会長としての任を「重責」と感ずることが出来るような歩みにしたいと思っています。なぜなら、重たさを感じるのは背負って初めて感ずることが出来るからです。

就任のごあいさつ

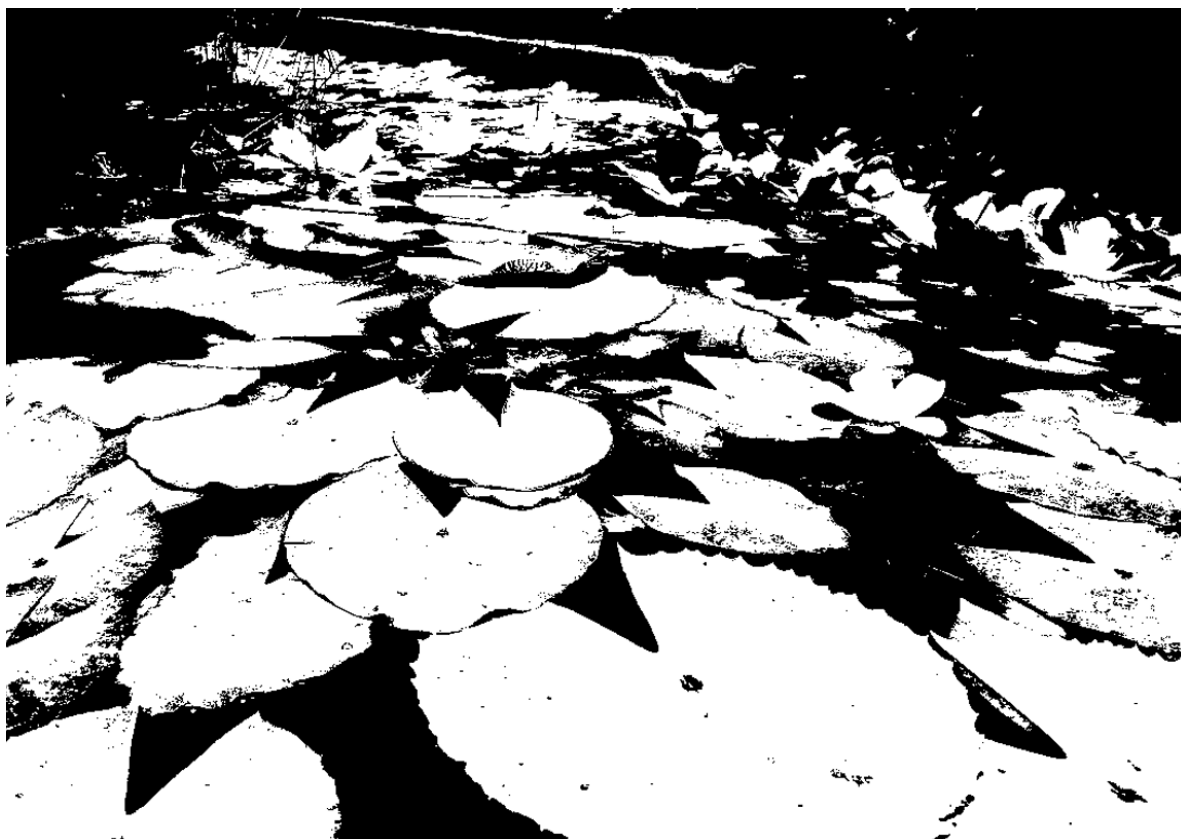
真宗大谷派同和関係寺院協議会 会計 吉田環樹

同和関係寺院協議会「同関協」会員の皆様方には、益々御健勝にてお過ごしのことと心からお慶び申し上げます。

このたびの役員改選におきまして、重ねて三役（会計）を仰せつかりました。もとより浅学にして力およびませんが、皆様方の温かいお力添えをいただきながら、その任を果してまいりたいと思いますので、何分の御指導御鞭撻の程を伏してお願い申し上げます。

間近に迫りました「宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌」も、いよいよ最終段階の準備が整えられているところですが、昭和四十九年十月に発足いたしました「同関協」にとりましても、発足後初めてお迎えする宗祖の御遠忌であり、かねてよりこの御遠忌を「めざめの御遠忌」「解放の御遠忌」と位置づけてまいりました私にとりましては感慨深いものがございます。

何卒、会員の皆様方にはこの御遠忌を御勝縁といたされまして、それぞれに今日までの総括と、新たな時代社会を見据えた更なる歩みにつきましてご提起いただきたいと存じます。今後ともなお一層の力強い御支援御協力をお寄せいただきますよう宜しくお願い申し上げます。



シンポジウム

- 同朋教団をめざして -

日時 2011年4月6日(水) 13時～17時

会場 総会所 (烏丸花屋町東入る)

- ・基調講演「解放運動と浄土真宗」
部落解放同盟中央本部執行委員長 組坂繁之 氏
- ・パネルディスカッション
「大谷派における解放運動の今後の展望について」
- ・むらの文化にふれる
「竹田の子守唄」コーラス
「肉ようかん」「さいぼし」などの試食

御遠忌特集

「同関協の御遠忌」

二〇一一年にお迎えする宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌において、解放運動推進本部と連携して総会所にて讃仰事業を行ないます。

テーマは「同関協」参与の故朝野温知師が願われ、最終講義の題名ともなった「同朋教団をめざして」です。

部落解放同盟中央本部執行委員長である組坂繁之氏をお招きして「解放運動と浄土真宗」についての基調講演、それを受けて「大谷派における解放運動の今後の展望について」真宗大谷派における部落差別問題実態調査を終えて」をテーマにシンポジウムを行ないます。

パネリストは組坂繁之氏、大阪人権博物館学芸員の朝治武氏、元大谷大学教授の泉恵機氏、「同関協」会長の片山寛隆氏の四名、浜口安宏解放運動推進本部委員がコーディネーターをつとめます。

また、被差別部落の文化に触れることを目的に、京都市改進黨地区女性コーラスによる「竹田の子守唄」、食文化に触れていただく「さいぼし」「肉ようかん」などの試食を予定しています。

今年度の「同関協」現地研修と併せて、糾弾以降の大谷派における解放運動の総括をしていきたいと思います。(関連記事一〇頁)

被差別の食卓

最近、ホルモンやカスうどんがB級グルメとして人気を博している。確かに美味しく、栄養もある。「何故、今までこんなに美味しいものを隠していたんだ」という声も聞かれる。しかし、隠していたのではなく、部落との交流によって知られるようになりました。また、『竹田の子守唄』には「久世の大根めし、吉祥の菜めし、竹田のもんばめし」と歌詞に出てくる。今の時代から見れば「これはあまり美味しくないだろう」という物を食べざるを得なかった歴史もあります。

門徒さんが住んでいる村では、毎年ゴールデンウィーク明けごろから、各家々で山椒と醤油の香ばしい香りが漂ってくる。「山椒の佃煮」。普通、山椒と言えば、ちりめん山椒のように実山椒の煮たものを思い出すが、ここでは葉っぱを佃煮にする。家によって様々な作り方があり、茎が入らないように丁寧に葉っぱを摘み取り、出汁ジャコを三枚におろし、はらわたを取った家。ジャコをミキサーですり潰す家。昆布を刻んだもの、スルメが入ったもの等、色々な味で舌を楽しませてくれる。白ご飯のお供に抜群で、初めて食べた時、思わずご飯の「お代りを下さい」と言ってしまった。

御遠忌特集 -むらの文化にふれる-

「被差別の食卓」

「山椒の佃煮、美味しいですね」とある妙齢の門徒さんに言うと、「ご院さん、これはな、今でこそ名物になっているけど、私のお祖父さんの時代は生活の為に、本当に苦勞をして作ってたんですよ」と答えが返ってきた。日々の生活に困り、現金収入を得るために、春先の一時に山椒摘みをされていたのだ。

山椒はご存知の通り、棘がある。そして、家の周りに植えてあるような山椒では辛さが足りず、深い山へ分け入って採らなければならぬ。棘が刺さることは日常茶飯事で、場合によっては、山から落ちて大怪我をされることもあったようだ。作るのに危険を伴う食べ物でもあったのだ。

飽食の時代に生きる私たちは、出されたものをただ「美味しい」「まずい」と言っているだけだが、それらの言葉が出るまでに、どれだけの御苦勞があったのかということを改めて感じなければならぬ。普段、何気なく口にしている食べ物。そこに隠された歴史を見直すことで、部落問題への違ったアプローチが出来るのではないかと思う。

(編集委員 吉田 剛)

コーラス「竹田の子守唄」

年輩の方はご存知だろうが、この唄は「赤い鳥」が1971年に、有名な「翼をください」とのカップリングで発売し、100万枚を超えるヒットとなりました。しかし部落の歌らしいという憶測によって、トラブルを避けようとする放送局等の自己保身から放送禁止歌となり、人々の記憶から次第に消えていきました。ですが今から10年前に、部落解放同盟改進黨支部女性部の皆さんのコーラスによって、元唄という形で蘇り、今日も歌われています。解放への願いを込め、自らの身元を隠すことなく、堂々と故郷の唄を歌い続ける彼女たちの姿に、頭の下がる思いがします。

この唄は、子守をして働く子供たちによって歌われた労働歌であり、^{もり こうた}守子唄と呼ばれます。歌詞からは、当時の部落の厳しい生活の様子や、子守をする子供たちの思い、またその中で逞しく生きる姿が描かれています。今では無くなってしまった当時の情景を目に浮かべつつ、様々な思い・願いの詰まったこの唄を、是非ご来場いただいて聴いていただきたいと思います。

(編集委員 谷内正孝)

御遠忌特集 -むらの文化にふれる- 「竹田の子守唄」

竹田の子守唄（元唄）

部落解放同盟改進黨支部女性部 採譜・編曲



この子よう泣く 守りをばいじる
守りも一日 やせるやら
どしたいこりやきこえたか

ねんねしてくれ 背中の上で
守りも楽なし子も楽なし
どしたいこりやきこえたか

ねんねしてくれ おやすみなされ
親の御飯がすむまでは
どしたいこりやきこえたか

ないてくれなよ 背中の上で
守りがどんと思われる
どしたいこりやきこえたか

この子よう泣く守りしょというたか
泣かぬ子でさえ 守りやいやや
どしたいこりやきこえたか

寺の坊さん 根性が悪い
守り子いなしで 門しめる
どしたいこりやきこえたか

守りが憎いとて 破れ傘させて
かわい我が子に 雨やかかる
どしたいこりやきこえたか

来いよ来いよと こま物売りに
来たら見もする 買ひもする
どしたいこりやきこえたか

久世の大根めし 吉祥の菜めし
またも竹田のもんばめし
どしたいこりやきこえたか

足が冷たい 足袋買うておくれ
お父さん帰ったら買うてはかす
どしたいこりやきこえたか

カラス鳴く声 わしや気になる
お父さん病気で寝てござる
どしたいこりやきこえたか

盆が来たかて 正月が来たて
難儀な親もちやうれしない
どしたいこりやきこえたか

見ても見あきぬ お月とお日と
立てた鏡とわが親と
どしたいこりやきこえたか

早よいにたい あのを所経えて
向こうに見えるは 親のうち
どしたいこりやきこえたか

© 部落解放同盟改進黨支部

同関協の御遠忌

「同関協の「発展的解散」を期して」

昭和四十九年の発足以来、同関協はこれまで三十六年の歩みをすすめてきました。大谷派教団の任意団体で三十年以上、運動を持続してきた組織は同関協だけだそうです。

同関協はこれまで、どこにどのような悩みを持った会員がおられるのかを把握できずにきました。この組織ではいわゆる「会員名簿」が開示されていません。それによって同関協内だけではなく、宗派内にどれだけこの問題に苦悩しておられる住職やご門徒がおられるのかわからない。何らかの事業に参画し顔を合わせないことには、誰が同関協に所属する寺院なのか、誰がその住職なのかもわからないのです。このような組織、団体は他にはないのでしょうか。

毎年、同関協にはその目的に賛同し会員となられる方々がおられます。また、過去にどのような経緯で会員となっていたのか不明な寺院もあります。このような現状をふまえて名簿作成については、会員としてその意思表示が求められます。すでに会員の扱いを受けている者にとつては、「あなたは同関協の会員ですか」という問いかけに対して、その自覚と意思を明確にしなければなりません。

発足以来、「同和」という用語の問題性が指摘されながらも、

御遠忌特集 同関協の御遠忌 つぎの御遠忌へ

あえてそこにこだわらながら名のり続けている「同関係寺院」という名称が示しているとおり、今なお糾弾中という事実に立てば宗派に「無関係寺院」は存在しません。そこで今後の活性化に向けて新たな仲間を募っていくとき、会員においては名のり直しを、そして非会員におかれては無関係を名のり続けるのではなく、関係寺院であるとの意思表示を求めたいところです。そのために、これまで関係を持てなくさせていたものとは何なのかを見つめ、「関係寺院」であつたと名のり上げる契機となる御遠忌でありたいのです。

その意味で、宗派が発行する「真宗大谷派寺院教会名簿」が、そのまま「真宗大谷派同関係寺院協議会名簿」になったとき、つまり全ヶ寺がその自覚に立ってその意思を表示したときに同関協は発展的に解散するのでしょうか。

そして「差別に苦しむものが一人でもいる限り その差別からの解放を自らの課題とする」という規定前文のことばが、同関協だけのものでなく、宗派のスローガンとなるよう同関協の一会員として次の御遠忌に向けて出発していきたいと思います。

(編集委員 米澤典之)



2010年度「同関協」現地研修 in ヒロシマ

「大谷派糾弾会とは？」

-何を問い、何を願うのか-

2010年9月9日～10日

大谷派が受けた部落解放同盟からの糾弾とは一体何であったのか。

一九六九年八月から始まる大谷派糾弾会、その理論的支柱の役割を担われた小森龍邦氏を講師に迎え「大谷派糾弾会とは？」をテーマに、願われたもの、願ったものの双方が、今一度向かい合うご縁として二〇一〇年度の現地研修が九月九日から十日にかけて、広島県尾道市において開催されました。

九日、尾道市の人権文化センターにおいて、浄土真宗本願寺派中央基幹運動推進相談員の坂原英見氏から「三者懇話会について」の説明、そして小森龍邦氏から「大谷派糾弾会で願われたもの」、翌朝は「真宗教学と部落問題」についてそれぞれ講義をいただきました。

今回の現地研修には、同関協の会員のほか、部落解放同盟広島県連の関係者と本願寺派安芸教区ならびに備後教区から多数のご参加をいただきました。

「教団内外における部落差別の克服を願いとし、差別に苦しむものが一人でもいる限り、その差別からの解放を自らの願いとする」ことを目的に毎年開催されている同関協の現地研修会。今年度も現地関係者ならびに教区関係者との交流や、情報と意見の交換の場を持ち得たことは、新たな連携を期し、今後の課題の共有をはかる上で貴重な場と時間となりました。

御遠忌事業として、故朝野温知師の願われた「同朋教団建設をめざして」と題したシンポジウムが部落解放同盟中央執行委員長組坂繁之氏を招いて二〇一一年四月六日に総会所を会場に開催されます。このシンポジウムと今回の現地研修とは共通の願いのもとで行なわれます。（関連記事六頁）

現地研修レポート

講義1

「大谷派糾弾会で願われたもの」

小森龍邦氏

皆さんご苦勞様です。遠方の方もいらつしやるとは思いますが、おいでを頂きまして、皆さん方の大變熱心な取り組みに対して、心から敬意を申したいと思ひます。それでは計画に基づきまして、「大谷派糾弾会で願われたもの」つまりは私どものような部落解放運動に携わる者が、大谷派糾弾会で何を願ったか？という当面の目標を持ったか？こういう事について、お話を申したいと思ひます。

私は一九八二年頃から十年位、部落解放同盟中央本部の書記長を務めさせて頂きました。その前の十年余りを、中央執行委員を務めて、更にその前の三、四年を中央委員というのを務めておりまして、大体この三十年の間の事は、流れとしては掴んでおりますので、記憶をたどりながらお話を申し上げたいと思ひます。

大谷派の幹部の差別事件、難波別院の事件というのは、それはたまたま難波別院の輪番一人の事ではなくて、大谷派全体の問題であつて、輪番がやらなければこの事件は起きなかつたかという、これ

に類似したようなことは、誰かが起こすかもしれない。そういう大谷派の宗門としての体質であると、非常に結構な総括が行われたと受けとめていたのであります。「さるべき業縁のもよおせば、いかなるふるまいもすべし。」口に南無阿弥陀仏を唱えておるけれど、さるべき業縁の如何によつては、いかなる振る舞いもするような曖昧な、あやふやな、差別体質を身に付けておる、煩惱具足の凡夫であるということを、難波別院の輪番の糾弾闘争で、宗門側が総括をされた訳であります。したがって我と我が身がどの程度の、曖昧な、デタラメな、弥陀の誓願から程遠い所に生きておる人物であるかということをつかつてもらうということの意味があつたと思ひます。

ちょうどその頃、曾我量深先生の、「何か特殊部落みたいなものではないか」という発言の、『中道』誌差別事件が起きた。特殊部落つまり被差別部落を、悪の代名詞として使つておる。曾我先生は日本の仏教会、とりわけ浄土真宗では、第一級の学者ですね。そういう人が発言をする。しかし直ぐに、真摯な反省をしている記憶があります。「機の深信」、これを自分が解つておるつもりであつて、実は解つていなかったという意味の自己批判をされておられる。実は私達が宗教界に対して問題提起しておるのは、仏教の一番大事な所のこの辺のことが、「あなた解つておられるんですか」という問いかけなんです糾弾は。一般世間に対しては、「あなたは社会意識としての差別観念に犯されていることを知っているんですか、解つているんですか」と言う問いかけなんです。

最近ちょっと下火になっておりますが、日本共産党と部落解放同盟との、するどい対立が行われていた頃、共産党員が差別観念を持つ

ていることは、有り得ないんだと盛んに言っておりまして。絶対に過ちを犯さないという、つまらん考え方に立っているのが、私どもには見えるんでございます。もちろん私たちの運動が、人間を深く考えておるか、少なくとも学問的に人間学的に、あるいは宗教哲学的に、しっかりしたものを持っていたのかと言うと、決してそうではないですね。曹洞宗の宗務総長の町田さんの糾弾を、品川の文化会館でやっておった時、我が方の糾弾する立場の者がですね、盛んに相手を罵り「コラ、クソ坊主」というような言葉も出てました。人権ということを問題にしておる団体がその水準ですから、まことに稚拙というか水準が低い訳です。しかし我と我が身の痛みを感じるからこそ、部落差別については、時に罵詈雑言を発するぐらい、怒りを発して相手を汚す訳です。あんまり高尚な話も出来ないし、高尚な概念でまとめている訳ではないけれど、あえて申し上げれば、自分自身というものをもう少し深く内省をしていてもらいたい。内省した自分の実像というものが、果たして仏の大慈大悲心になっっているかということを、よう反省していつてもえませんか？こういう意味なんです。その反省を迫る手段・方法が糾弾であります。

私が本部の書記長をしておる時に、訓覇信雄氏が、『同朋社会の顕現』というテーマで話をされた中に、「私はもう、こういう年になつたが、今しばらくは清沢満之先生の教えられるところを勉強したいと思う。よって同和のこととか靖国の事などする暇はありません。なんだか世間が騒いで、信心の社会主義や何じゃら言つて叫んでおるけど、そんなことに惑わされずに、信心第一主義というか、清沢先生の教えに従わなイカンよ」と、こういう意味のことを言われた

んですね。時の宗務総長が「同和に関わりたくないとか、靖国に関わりたくないとか、そこが問題であつたんではなくて、本当の真宗教学を勉強したいということが問題であつたんだから悪気は無いんです」と、一生懸命弁解されたんです。先輩の訓覇先生を擁護したんでしようが、私から見ると、本当の真宗の教義を自分の物にしようと思えば、社会の現実的・具体的中身のある、それこそ訓覇先生の言葉を使えば、同和のこととか靖国のことに関わらなければ、ほとんど分らないです。それで、訓覇先生が来られたところで、私が言うたんです。「あなたと私と較べたら、真宗教義に関わる言葉を、どれだけようけ知っておるかということについては、月とスッポン程あなたの方が良く知っておられる。しかし浄土真宗の周辺で物を考えておる私から見ると、あなたは本当に大慈大悲心ということが分かってないんじゃないですか。もう一遍あなた自身に日々問うてみなさい。キザな言い方する様ですけど、同和のこととか靖国のこととか関わっておる暇はないと言った言葉は、親鸞の教えに合致しておるか、親鸞聖人に尋ねてみなさい。」私の様な立場の者に言われたら、親鸞聖人に尋ねてみますと言うしかないですね。それでどうとう東本願寺で大きな糾弾会を催す段取りとなった。その時に訓覇先生曰く、「私は深く親鸞聖人の教えを身に付けておると思つていたけれども、内実はそうではありませんでした。私自身が差別觀念の虜になっていることが良く分かりました。つまり仏の大慈大悲心というものは、そういうものではない。もっと深いものである。」まあこんな意味の反省をされました。しかし大事なことを訓覇先生が話されたことを素直に受け取るもんばかりではなかったようです。相

当難波別院の事件から時間が経っておりましたが、しかるべき時にそういう事件が起きるのも、あえて言えば仏の計らいである。そういう縁を作られたという意味で仏の計らいと皮肉に言わせてもらえらると思うんですね。

小川一乗先生は、「同朋」いう雑誌で、戦争ということにつ

いてね、武器を持つ

て平和を守るといふのと、武器を持たずに、非武装で平和を守るのも、浄土真宗の他力の信といふことで、自力無効といふことから言ったら、どっちもどっちなんだと、もつと深い真宗の教義に基づいて、信心といふ世界からこれを見なければならぬ。こう言われとることは、憲法九条の崇高な精神を考えると私はですね、何を言うのか、それが大慈大悲心かと言わざるを得ないです。しかしナシのついでだから、介入するんです。それで、「このままだら仏教は持ちませんよ」と言うた。要するに本当の浄土真宗の教え、宗教哲学に対して心から納得するといふか、心酔するような状況を作らねば、浄土真宗はもう持ちませんよ。その最初に崩れるものが、葬式せん



ようになって崩れるんです。そうならないためには、お寺さんが親鸞聖人の教えの真実を、人々の生き方としてしっかりと受けとめて、ちゃんとももの考え方、我々運動家でいえば思想ですな、思想にブレのこない門徒さんを沢山抱えることですよ。

私らの部落はね、栄町言いよるんです。それで「西町」に変えたんですが、また「西町」は差別的な表現になる。言葉を変えても意味ないんです。実体を変えなイカン。それで言葉の持つ意味を、本当に正しい思想に結び付けて、それがやがて実体の所まで及ぶようにならないなら問題の解決にならない。

大体、何を糾弾会で問い、何を願ったか。それはやはり、浄土真宗の教えの根幹とも言うべき、我と我が身を省みる。大慈大悲心のところへ持ってこられたら、煩惱具足の凡夫ということが問題にならない。だから今日は、大きく四つ問題を取り上げさせてもらいましたけど、社会意識としての差別観念。空気を吸う如く、自分では意識しないけれども、社会意識に汚染されとる、我と我が身が分かるようにならないとダメですよといふことを、解放運動は一般世間に對して言っとるんです。それは耳に痛いんです。賢いと思うとる人ほど耳に痛いんです。そこで論語に曰く。「良薬は口に苦し。病に理あり。忠言耳に逆い。行いに意義あり」。それで世間で賢らしいフリをしよる人に、私は巧みな言葉を使って、言うておる訳です。ここら辺りが、今日の糾弾闘争で願われたものといふことの、私なりのまとめかと思ひます。

(以上抄出・文責編集委員)

現地研修レポート

講義2

「真宗教学と部落問題」

小森龍邦 氏

「真宗教学と部落問題」というテーマでお話をさせていただきます。浄土真宗のことは皆さんの専門領域のことです。ただ、部落問題は体験的にも研究的にも深く関わってきます。そのようなことを念頭において頂き、浄土真宗の教えと部落問題、あるいはそれを解決しようとしている部落解放運動についてお話を申し上げたいと思います。

他力の信心とか、他力ということ、なかなか私は理解できませんでした。文字も書けないようなお年寄りが、「阿弥陀さ

んはありがたいものや、着の身着のままでお救い下さる」ということを、お寺で聞き、帰ってこられたということを、幼少のころから見ておりました。それがどのようなことなのかよく分かりませんでした。

そのままを受け止めると、社会的な問題に納得がいけない。やはり自分でこつこつ努力して築き上げてゆく方法でなければ、幸せはつかめないのではないか。特に、部落差別で世間から圧迫されてゆくことに対抗するため、コツコツと築き上げた財力というものを使い、上の学校へ通い、世間を見返すということでない、部落差別の問題を解決することは出来ないという考え方が頭の中を行き来し、なかなか他

力の信心ということは理解できませんでした。しかし、しばらくすると、「いずれの行もおよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし」という『歎異抄』の言葉に出会い少し納得しました。

五木寛之さんには親近感をもって尊敬する面はあるけれど、根本的には納得のいかないことがたくさんある。それを『蓮如論』という中に書きましたが、解放運動の立場から、親鸞の思想、『教行信証』を読み解く時間も力もないから、『歎異抄』に持ち替えた。『歎異抄』に則って、『解放理論と親鸞の思想』を書いたのです。読み返して、間違ったことは書いていない。あれから二十数年経ち、少し理屈をつけたら受け入れられると最近思っているのです。

これから皆さんと語り合いたい、いくつかの問題があります。その問題というのは「業・宿業」の問題です。

一九八〇年代初めの頃浄土真宗本願寺派から電話がかかり「差別問題における業論と宗教」を一冊読んで欲しいと頼まれました。全てはこの世の問題であると書いてありました。それらが少しでも前世に関わることであるという論理展開をしていたなら差別だけでも、そういうことは仏教では説かれていないと書いていた。私はこれではいけないと、業論をどのように考えるのかを話した。それで、『業・宿業観の再生』という本を書いたのです。「業・宿業」というのは非常に大事な哲学的な思想というか思惟です。

本願寺派の本は『スッタニパータ』を引用してきました。『スッタニパータ』には現世の行い、業によって社会的な立場になるのであると書かれている。従って本願寺派の業論としては、生まれによって部落民になるのではなくて、全て部落民だからと非難中傷するのはこの

世の問題だからこの世が悪いんだという意味をもって完結していた。『スッタニパータ』に書かれているからというのも考えものです。私は『スッタニパータ』に書いてあるものだったら、そこを撃破しないとなかなか納得してもらえないのではないかと何日も考えたのです。

業とは前世からこの世に受け継ぐ主体、アートマン、それら全ては縁によって起こる。縁の極限状態は空でしょう。全ての縁を取り外したら無でしょう。龍樹大師が言われた空でしょう。前世の誰がどういう形で私となって受け継いだのか。こう考えますが、無なのです。無いものを守っているのですよ。これは私が言っていることではなくて、龍樹が言っているわけですよ。親鸞聖人が受け継がれたわけですよ。

「みなもって、そらごとたわごと、まことあることなきに、ただ念仏のみぞまことにておわします」と言うなら、その念仏を称える者がここまで立ち上がってゆかねばならない。親鸞の教義に基づいて、親鸞が時代制約によって言わんとして言いえなかったことを言われたらいい。今のような「ただ念仏のみぞまことにておわします」ということを実際されたらどうですか。実際は自力無効という考えがパツと浮かびますけれど、屁の突っ張りにもなりません。これはまた、いろいろな教義を総合的整合性に照らしてそういうものではないということが明らかにあります。

菩薩道を否定されますか。否定されないでしょう。菩薩道の行をどれだけ積んでもそれは無効ですか。法蔵菩薩の五劫の間の思惟というのは、インドの長い歴史の間に作られた人々の知恵の抽象的表現じゃ

ないですか。従って、そういう理論の体系的総合性を考えなければならぬ。

『教行信証』には読み変えが多い。私たちが読み変えをしたら、色々言われる心配をしなければいけない。だから、天親の言われておることをすぐに聞けば良いのに、それをまた曇鸞がどう言われておると言って、二つか三つクツションを置いて、自分の了解を正当化する。思想体系に合うように、親鸞聖人の言わんとして、一〇〇パーセント言い表されていることを整理する必要があると思います。それを責任のある人が深刻に考えてもらいたい。

(以上抄出・文責編集委員)

小森龍邦氏

略歴 1969年 部落解放同盟広島県連合会委員長
(91年まで務める)
1982年 部落解放同盟中央本部書記長
1990年 広島三区より衆議院に当選
(二期務める)
2001年 部落解放同盟広島県連合会委員長に
再度就任 (04年まで)
現在 部落解放同盟広島県連合会顧問
新社会党中央本部顧問
(財)ヒロシマ人権財団理事長

「三者懇話会」

本願寺派の安芸教区と備後教区と部落解放同盟広島県連の三者間で、真宗教学を研究している。

特に、解放運動の中で問題となった、真俗二諦論や業・宿業論を中心に学びを深めている。

新編集委員自己紹介

「同関協だより」編集委員 杉谷 曉道

この度「同関協」だよりの編集委員をさせて頂くことになりました、高岡教区第三組の慶誓寺の杉谷曉道と申します。今まで自分から逃げてばかりで、きちんと務まるか不安ではありますが、出来る限りさせて頂きたいと思っています。

教区では解放運動の行事が多くあり、出来る限り参加させて頂いています。「同関協」の研修会はその延長線上のものと考えています。先般の尾道の現地研修に参加させて頂いた時に、編集委員のことをお聞きし、お役に立てるものならと思い編集委員になることを決めました。

この「同関協」や解放運動に興味を持ったのは祖父の影響もありますが、何より自分というものを自覚していない情けなさがあるところが一番の理由です。よく父に言われる言葉ですが、「おまえは逃げている」という言葉がいつも胸に突き刺さっています。全ての事に対して見ようとせず、向き合わないことに最近気がつくきました。そして自分のせいで家庭が壊れていきそうな所まで来ている状況です。

私という人間はどういう人間なのかという問いをいつも持ち続けることが大切ではないかなと思います。この編集委員という仕事をさせて頂いて、自分と向き合う契機になればと思います。こんな自分でも良いのかと不安になっていきますが、皆さんに助けて頂きながらつとめていけたらと思います。私は人見知りですが、挨拶もあまり出来ませんが、どうぞよろしく願います。

会費納入のお願い

【年会費】 3,000 円

【郵便振込口座番号】

01010-6-2770

【加入者名】 同和関係寺院協議会

ご理解とご協力をお願いします

同関協だより 第45号

発行日 2011年1月31日

発行人 片山 寛隆

発行 真宗大谷派宗務所
解放運動推進本部内
「同関協」事務局

〒 600-8505

京都市下京区烏丸通七条上ル常葉町

Tel 075-371-9247

Fax 075-371-9224

E-mail kaiho@higashihonganji.or.jp

編集後記

▶いよいよお待ち受けしていた宗祖親鸞聖人の七五〇回御遠忌が厳修されます。この御遠忌をあなたなら、何と位置づけられるでしょうか？かつて、蓮如上人の五百回御遠忌は「慙愧の御遠忌」と呼ばれました。果たして、私たちは本当に慙愧したのでしょうか？▶御遠忌法要を単なるお勤めとして位置づけると、別に「御遠忌」である必要はありません。五十年に一度の大法要として勤める以上、そこにいつもより大きな願いを持たなければならないのではないかと思います▶「解放の御遠忌」。真宗大谷派に関わる一人ひとりが差別からの解放を目指し、改めて同朋社会の顕現を考える。そのような御遠忌になればと、宗祖の御遠忌を前に熱い思いを込めて、同関協は活動しています▶今号より、新たに編集委員として、杉谷君が加わりました。三人より四人、四人よりも五人と人数が増えたことにより、様々な角度から取り組めるように、これからは頑張りたいと思います。これからの同関協に熱い思いを込め、『同関協だより』第45号を皆様にお届けします。皆様のご意見をお聞かせください。

(編集委員 吉田 剛)